



藤村君を憶ふ

安 田 正 鷹

かいゝかげんのことを言つて、追拂つてしまふことに成功した。

私が藤村君を知つたのは、昭和四年の頃だつた。その頃は用件を帯びて、兵庫縣に出張してゐた。少し込み入つた調査であつたし、私が調査してゐるといふことを、外部に知られては、よくないこともあつたので、私は議事堂の建物の一室を借りて、そこへいろいろの書類を運んで貰つて、そこで調査をしてゐたところが、どうして知つたものか、新聞記者の一團が、私のゐる室へ、ドヤドヤと入つて来て「何をしてゐるんだ」と遠慮會釋なく問ひかけた。思ひがけないことであつたので、一時は相當驚いたものゝ、何と

そんなことがあつてからのことであつたと思ふ。用事があつて、私は本廳舎の方へ行つたのだが、本廳舎は道路一つを隔てゝ、裏玄関になつて居り、そこから入つて行くと、廊下が鍵の手になつてゐて、晝中でも薄暗いほどであつた。恰度廊下の半頃まで行つたときに、私は向ふからニコニコやつて来る三十前後の餘り大きくない男に行逢つた。私とその男とが向ひ合ひになると、その男は出しぬけに「オイ何しに來て居るのかい」と言つたものだ。「いつ來たんだ」とも言つたやうだつた。見るとニコニコはして

居るもの、きよろツとした眼を持つてゐる男だつたので、私は直感的に新聞記者だなどと思つてしまつた。それで逃げるに如かずと思つて、「ウウン何一寸用事があつて来たけれど、今夜あたり歸るつもりだ」と嘘八百を並べて、相手の男の返事も待たずに、行き過ぎてしまつた。

あとで知つたのだが、それが最近内務省へ轉任したばかりの藤村君だつたのだ。無論挨拶に廻つて來てゐたであらうから顔を知つてゐなければならぬ間柄であるし、それなればこそ藤村君も、私といふものを知つてゐて、廊下で話かけたんだらうが、私は藤村君の顔を覚えてゐなかつたし、まして意外なところで逢つたんだから、それとわからなかつたものらしい。今から考へて見ても、洵に相濟まぬことをしたわけであるが、私といふ男を、藤村君は、何と素氣ないやつだらうと思つたかも知れない。

私は用事が終つて歸廳すると、すぐ藤村君の室へ行つて見たのだが、私よりも先に歸廳したらしく、藤村君は、机にしがみつくやうにして執務をしてゐた。一見して兵庫縣

廳で逢つた藤村君だといふことがわかつたので、「先日は失禮」といふと、何のこだわりもなく「いや失禮」といふ返事をしたやうだつた。それで安心に似た軽い愉快な氣持ちで、私は藤村君の室を辭したのだが、それ以來私は藤村君といふ男を知るやうになり、室へ行く用事があると、一言二言づゝ話をするやうになつたのだが、いつもうつむいて熱心にコツコツと仕事をやつてゐた。なかなかよく出来る男だといふ批評を耳にしたり、道路の事務にはよく精通してゐるといふことを聞いたりしたのは、それから後のことである。

二

失業救済土木事業といふものが始められたり、時局匡救土木事業といふものが始められるやうになると、土木局の豫算事務は、急に多忙になつて來た。そして各課との交渉事件も自然頻繁になつたわけであるが、河川と港灣の事業は、どうしても特定されたものになるに反して、道路の事

業は普遍的で片寄らないといふ特質をもつてゐたので、時局匡救事業の最後の制當は、道路課で擔當することになつた。その制當の計算をするのが、藤村君の仕事になつてゐた。算盤は特に速いといふわけではなかつたやうだけれど兵庫縣で豫算をやつてゐたといふ經驗もあるし、コツコツと地道な仕事をするに、もつて来いといふ男であつたから、自然かういふ仕事は藤村君に振當てられたものらしく、藤村君もそれに興味を持つてゐたものか、倦まず撻まずねばり強く、コツコツと努力してゐた。その頃は十條の方に住んでゐたやうであるが、ある時などは、二人の子供さんだけが留守をして居て、暗くはなるし、空腹にはなるが、役所が忙がしくて藤村君が歸らないものだから、唯泣き叫ぶばかりで、どうにもしやうがなくなり、お隣の家で同情して、翌朝まで世話をして貰つたといふやうなこともあつた。こんなわけだから、藤村君自身も相當疲れたらしい。よく體が續くねと人が問ふと、「家を出るときに、蝮酒を飲んで来るんだ」と言つてゐた。蝮酒といふやつは確かに効

目がある。いくら疲れてゐても元氣が出て來ると言つてゐた。

かういふ努力が、終ひに酬ひられるときが來て、昭和九年になつて藤村君は、土木事務官に榮進した。全く思ひもうけぬことであつたから、餘程うれしかつたものと見えて、拾ひものをしたと言つてゐた。三十五になつたばかりであるし、俸給の方も判任官の三級になつたところであつたから、全く思ひがけぬ榮進だつたのだ。藤村君より俸給の多いものが、まだ相當にゐたのに、それを飛び越へて、藤村君は土木事務官になつたのだから、人もその意外な出世に驚いたが、藤村君自身も驚いたのだ。この拔擢に感激したのかそれから、一層勉強するやうになつた。また四圍の事情から、どうしても勉強しなければならなかつたのかも知れないが、蝮酒を飲まねばならぬ多忙さが、それから長く續いた。

そして始終中忙がしいのであつたが、藤村君はその多忙の中から、「道路の改良」のために例規になる通牒のやう

なものの判決例のやうなもや、行政處分例のやうなものを蒐集して、これを紹介することを怠らなかつた。地味な記事で、注意して見ないものも多かつたらうが、府縣の實際事務をやつてゐるものには好箇の參考資料であつたから、相當便利なものであつた。藤村君の性格はこの一事によく表はれてゐた。藤村君はそういうふ男であつた。

三

藤村君は餘りいろんなことをしなかつた。登山も餘りしなかつたやうだし、運動もこれといつてしなかつた。遊戯的な方面でも、玉を少し突くことと圍碁をやつた位のものだ。

この點は何でもやるが、何をやつても一人前になれない私以下であつたかも知れない。私は藤村君と玉を突きに行く機會はなかつたが、圍碁の方は、ときどきやつた。それもお互に訪問し合つて、落ついてやるといふのではなく、役所の時間待にやつた位のものである。私どもはよく遅く

まで居残りをしたのであるが、毎日計算をしたり、その外の用事があるといふわけではなく、時には手持ち無沙汰に只徒らに待つこともあつた。開議の結果を待つとか、大藏省からの返事を待つとか、省議がすむのを待つてゐるとかといつた場合である。そんな時間があるなら、書類でも見ればいゝじあないかと思ふものがあるかも知れないが、特に急なものがあれば格別であるが、それでもない書類を見る氣にはどうしてもなれないのだ。それで夕刊を見るとか、いろんなことを駄べるとか、して時間を費すのだが、その一の方法として、折疊の出来る碁盤を備へて置いて、鳥鷲をたゝかはすことが行はれてゐる。これは實は御法度なんだがこつそりやるのだ。私と藤村君とはこの御法度碁を時々やつたものだ。

實をいふと、藤村君よりも私の方が二、三日ほど弱いのだが、最近少々上手になつたといふので、私が先で行くことにしてゐた。しかし元々私の方が弱いのであるから、二面三面と打ち續けて行くに従つて、私の碁勢は衰へて行つた。それ

で二目を置き三目を置くのであるが、かうなると、何目置いても勝目がなくなり、時間も相當過ぎて、歸るのが普通であつた。

しかし次の機會に打ち始めるときには、「先から始めよう」と言つて、私は頑張つたものだ。藤村君は前日のときのことを言つて、二目か三目置かせやうとするが、「先のこときは先のと看、今日のこときは今日だ、現在の實力でやるべきもので、過ぎ去つたことを言つても仕様がなまいふのが私の主張であつた。

押問答の末は、いつも藤村君が譲つた。それで常に先から打ち始めたのであるが、一晚のうちに二目になり、三目になつて、私の碁は回を重ねるに従つて駄目になつて行つたことは前日の場合どほりであつた。

無理を言ふのは常に私であつたが、その時は相當憤慨して歸つて行くものが、いつかまたやつて來ては、同じことを二人は繰返すのであつた。

四

つい一月ほども前のことであつたらうか、夜遅くなつて歸つたときがあつたが、電車もないほどの時間であつたから、自動車を呼んで貰つて歸ることになり、私と藤村とは、同じ方面だといふので、一つ車で歸ることになつた。雨が大分強く降つてゐた。關係もあつてか、話が妙にしんみりとしたものになり、子供の話や暮し向のことまで話した擧句、子供が五人もゐるとどうしても、やり切れないから、女中を置くことにしたんだが、總勢八人暮でやり切れないとか、一番上が女の子で、女學校の二年生になるんだが、小學校から一番で通して來て、女學校でも優等生だとか、次の女の子も長女のやうにいゝ成績で進んで來たとか、三人目がたつた一人の男坊主で、小學校の一年生だが、餘り勉強しなくて困つてゐるとか、小さい子供が風邪でもやると醫者が遠くて困るとか、いろいろの苦勞話をやつたものだ。そしてそんな話の間に、どういふものか十二時を過ぎ

て歸ると眠れなくて困る。先達も朝の四時まで眠れなかつた。そういふやうなときは、あせればあせるほど眼が冴へて眠れないといふことや、どうかすると夜中に醒されて家人を驚かすといふやうなことを語つたりした。それで私は「僕も眠れないで困ることがあるが、少し神經衰弱じあないか、それならいゝ藥を教へてあげやう」といつて、ヴローム水のことを話したりした。

それから間もなく、あんなことになつてしまつたのであるが、それ以來私と藤村とは餘り語る機會がなかつた。

たまたま早く歸ることがあると、私の室に寄つて、「まだやつてるか、僕はもう歸るよ、フッフ……」と言つてにややつて出て行くことがあつた。急死する二日まへにはどう思つてか、わざわざ電話をかけてよこして、「まだ歸らないかフッフ……」といつた。それが私と藤村君との最後の言葉となつてしまつた

五

七月四日の朝、私はまだ眠つてゐたから、多分六時頃らしいが、突然蚊帳の外から「藤村さんがお歿くなりになつたそうでございます」と言つて來た。その聲で眠から覺めたのであるが、死んだことを朝早くから傳へて來るほどのものに、藤田といふ男を思ひ出せなかつたから、もしかとは思つたけれど、藤村じあないかと反問したら、すみませんでした。藤村さんとおつしあいましたといふ返事だつた。藤村が死ぬ筈はないと思つたが、それでも態々通知があつたのだからほつて置くわけにも行かず、いそいで用意をすまし、食事の準備をいそがせて家を飛び出した。

目黒區宮前町光ヶ丘一五〇四といふ所書を唯一のたよりに、何でも自由ヶ丘驛の方面だといふことだけを目當に電車に乗ろうとしたのだが、何處まで乗つたものか、まるで見當がつかなかつたので、驛で問ふて見ると、知らないといふ返事であつた。しやうがないので、自由ヶ丘まで行く決心をして、目的地で下車し、行先を述べてどう行くのかと問ふと、バスにお乗りなさいといふことであつた。教へ

られた通りのバスに乗ると、乗客は私一人であつたが、道に女車掌は親切のものであつた。私の下車するところを、「お教へ申します」と言つて呉れた。安心して周圍を眺めてゐると、梅雨期には珍らしく、朝の空氣がすがすがしく、それに附近はこれから發展しやうとするところだけに、樹木が何處にも繁つて居て、ところどころに丘があつて、杉の群立が黒く眺められた。

藤村君の家の玄家先に辿りついたのは、それからもまだ相當の苦心を要したわけであるが、兎も角も標札の前に辿りついて、私は安心に似たものを感じた。が同時に一種の不安もあつた。それは家の内が靜まり返つてゐて、何の變つた氣配もないし、つまらない挨拶をして、氣を悪くしてもいけないといふ心配があつたからだ。しかし玄關先に立つてゐてもきまりがつかないので、思ひ切つて戸を開けて中へ入つた。何ごともなかつたら、一寸用事があつて近くまで來たから寄つたと言ふつもりであつたが、不幸にも、そう言ふ必要はなかつた。私は次の間に控へて、憂へ顔を

何かを相談してゐる新居道路課長と、近藤事務官とを發見したのだ。

藤村君が急死したといふことは、不幸にも私の聞き違ひではなかつたのだ。この哀しき現實を前にして、私の思考力は、一時活動を停止したかに思はれた。

六

藤村君は、この家の客間らしい室に横たはつてゐた。すべてが、まだその儘の姿であつた。たゞ普斷着らしい單衣で、顔の見へないやうに蔽つてあつたゞけである。そしてあり合せの器に、線香の煙が立ち上り、香が焚かれてあつた。

私はそつと遺骸に近寄り、蔽つてある單衣を取り除いて見た。顔の色こそ變つてゐるが、少も變つてゐなかつた。生前のまゝの姿で眠つてゐた。いつも前額部の禿げ上がるのを、氣にしてゐたが、もうそんなことを氣にする必要もなく、何ものにも超越した。安心してきつた姿で横はつてゐ

た。たゞ黒い頭髮と太い睫だけが、何だかまだ生きてゐるやうで、そぐわないものに思はれた。

私は「何故死んだんだい」と言ほうと思つたが、聲が出なかつた。そのかはりに、熱いものが、兩眼からハラハラと膝の上に落つた。私はこの思ひがけない心の激動を、傍のものに覺られまいとして、つと體を浮かせて、お焼香をした。合掌してゐる兩手の上へ、またもや熱いものが落ちそうになつた。

「死なゝくてもいゝじあないか」と私は言ひたかつた。恰度藤村君が自殺でもしたかのやうに、私は怨みごとが言ひたかつた。好んで死んで行つたのでもない藤村君に對して、そしてまたそれを知らない私ではないのだが、私の氣持ちは、かう言はねば納まらないものがあつたのだ。

先に來てゐる新居道路課長や近藤事務官の氣持も、私のこの氣持ちと異なるものがあつたらしく、何もしないで、しかもいそいで、すべきことの多くを前にして、どうしてよいか、考へが纏まらないやうであつた。

私どもが差當つて必要ないろいろのことを、相談し始めたのは、谷口事務官がやつて來て、からのことであつた。

しかし一度これだけのことをしなければならぬといふことがわかると、定められた部署に忙がしく従事した。佛には申譯のないことながら、讀經を靜かに聽聞してゐるやうな餘裕は少しもなかつた。まもなく朴報を聞き傳へたものが集まつて來た。通知狀を出すことや、葬儀の準備をすることなどまで、集まつて來た友人の手によつて取行はれた思ひも寄らぬことだといふ面持ちを誰も彼もしてゐた。

七

通夜はしめやかではあつたが、淋しくはなかつた。家の中に入り切れないほどの人が集まつてゐた。遺骸は柩に納められ、祭壇の上に安置されてあつた。肖像寫眞がまだ出來て來ないので、見たところ何となく、もの足りない感じはしたが、内務大臣や、内務省高等官一同や、土木局一同や道路改良會などから送られた花輪によつて、柩は蔽はれ

てゐた。友人によつて、かはるがはる焼香が行はれ、蠟燭の光があかあかとあたりを照らしてゐた。晝の間にすつかり準備が整へられたものと見へ、長い讀經の間を一同のものは靜かに端座してゐた。一卷のお經が終る毎にお坊さんは傍の座に位置をかへ、大きく衣の袖を正して、南無阿彌陀佛を繰返した。それに和すかのやうに、藤村君の夫人が南無阿彌陀佛を稱える聲が聞こえた。しかしその語尾は咽び聲にかはつた。十三になるお嬢さんの口からも咽び聲が洩れた。誰も彼も聲を出すものとはなかつた。夫人の傍には五人の子供さんが取巻いてゐた。二人目のお嬢さんの目には露が宿つてゐた。長男の壯さんはまだ八歳で、小學校の一年生だといふことであつたが、奇麗に飾られた祭壇や大勢の人々を、もの珍らしさうに眺めたり、焼香するものゝ様子を見入つたりしてゐた。あとの二人の女の子は夫人の膝の上に手をおいて、つぶらな目なざしで、あたりを不思議そうに眺めてゐた。無心な、いたいけない子供さんの所作に、涙を催さぬものはなかつた。長い讀經が終ると、

居すまいを直すものや、あすの天氣のことを語るものや、未だに到着しない國許の人々のことを語るものなどで、一時にざわめき立つた。國許にゐて藤村急死の電報を受け取つた両親の驚きはどんなであつたらうと思ふと、臉があつくなつた。兵庫の奥深いところにある藤村君の郷里は、姫路まで出るに、自動車で三時間もかゝるといふことや、うまく汽車に乗つたとしても、今夜の通夜には間に合ひそうもないことや、不案内な汽車の旅を、一刻も早く東京に行かうとして、オドオドしてゐるであろう人々の身の上を思つたりしてゐるところへ、藤村君の昇等辭令や叙位の御沙汰書が届けられた。先づ夫人にそれを示し、次いで靈前に運ばれると、祭壇の傍から一としきり嗚咽が聞こえて來た。通夜の夜はいつしかに更けて行き、朧にくもつてはゐるが、満月に近い月が空高くかゝつてゐた。

八

引延ばされた寫眞を飾ざると、新らたなる悲みを覺えた。

香の煙の絶へないやうに、私が靈前に近づくと、祭壇のところに見守つてゐる六十ほどの人と顔を見合せた。その人は私が焼香を済ますのを待ち構へてゐて、私に挨拶しかけた。それが藤村君のお父さんであつた。見たところ髪こそ白くなつてゐるが、まだ鬢鏤としてゐた。長い旅に疲れた様子もなく、氣持も案外しつかりしてゐるやうだつた。

藤村君のお父さんは、私が座へ戻るのを待つて、靈前に赴いた。何をするのかと思つてゐると、つと立ち上つて、今飾られたばかりの藤村君の肖像をいつまでも、いつまでも、見つめてゐるのであつた。いつ會つたのが最後であつたか知らないが、折角立派になつた、たゞ一人の嗣子が、今は柩の中に横たはつてゐるのである。それは夢でもなければ、また現でもないのだ。自分の子供だけが、どうしてかうなつたんだらうと、啣こつが如く、怨ずるが如き心持ちであつた。そうと私には思はれた。遺が男親だけに、悲しくとも涙だけは見せないものゝ、泣けないだけに、泣くにも勝る苦しいものがあつたらうと思はれた。私はその座

にゐたたまらなくなり座を立つて外に出てしまつた。

それから間もなく、最後の讀經が始まり、それに續いて、告別式が行はれた告別式が終ると、柩の蓋を開いて最後の別れが行はれた。そして肉親のものや友人によつて蓋に釘が打たれた。金屬と金屬との觸れ合ふ高い響が、室の中に一つばいになり、玄關から外へ洩れ傳はつて行つた。柩を取圍んで、皆のものが唯一點を見つめて居た。それは何を眺めてゐるのでもなかつた。再び見ることに出来ない骸に對する氣持ちで胸がいつばいになつてゐたのであつた。しかし、この沈黙な状態は、いつまでも保たれなかつた泣き崩れる體の動きや、鳴咽や、啜泣きのために、にはかにざわめいた。このざわめきの中にも、次から次へと釘が打たれて行つた。

釘を打つものゝ手は、只徒らに動いてゐるに過ぎなかつた。機械的に動いてゐるに過ぎなかつた。

あゝ藤村君も白玉樓中のものとなつたのだ。

(七月十月初七日の夜)

附記

藤村君は今年三十七歳であるから、まだ恩給にはならないそうである。それも僅かに三箇月ほど足りないそうでお氣の毒でならぬ。現在の住居は、同潤會の分譲住宅であるが、これは誰かに譲つて、家族は郷里兵庫縣六粟郡千種村に引籠るとのことである。郷里には幸にも兩親が健在であるからよいやうなものゝ、差當つて困ることは子供さんの教育である。上のお嬢さんは第八府立にゐたのだから、郷里の何處かへ轉校しなければならぬが、千

種村には入るべき學校がなく、下宿をするか寄宿舎に入らねばならぬ。通動するのと下宿なり寄宿舎に入るのでは費用が大分異なる。それに次々と上の學校に上らねばならぬ子供さんがあるから、この點が一番困つたことになつてしまつた。今事情のわかつてゐるのは上のお嬢さん一人位のもので、小さい人には何も判らないやうだが、未亡人にはこれが、何よりの苦勞らしい。何れにもせよ、お氣の毒なことである。これを藤村君の遺族だけのことゝ言へやうか同じ定めでないと誰が保證しやう。

北海道打診

(七)

瀧川勸則

(十一)
續

◎實績(續)

(1) 昭和二年度(第二期拓殖計畫實施第一年)事業の實績
本年度既定の工事費豫定額は四百三十一萬九百四十五圓であつたが豫算も同額の成立を見た此の成立豫算の範圍内